

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会
第6回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事要旨

日時：2018年1月10日（水）15:00～17:00

場所：釧路地方合同庁舎 4階 第3会議室

【出席者（敬称略・順不同）】

< 専門家 >

- ・高橋 忠一（再生普及小委員会委員長）
- ・境 智洋（北海道教育大学釧路校 教授）

< 学校教員 >

- ・標茶町立標茶小学校 長山 亜由美
- ・鶴居村立鶴居小学校 中川 道高
- ・鶴居村立下幌呂小学校 柴田 康吉
- ・釧路町立昆布森中学校 三光桜 正洋

< 学校教育行政機関等 >

- ・釧路市教育委員会 学校教育部 教育支援課 指導主事 松本 孝也
- ・標茶町教育委員会 指導室長 蠣崎 浩一
- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 所長 安田 直人

< オブザーバー >

- ・国土交通省北海道開発局釧路開発建設部治水課 上席治水専門官 小澤 徹
治水専門官 稲垣 乃吾

< ワーキンググループ事務局 >

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所
国立公園課課長補佐 桑原 靖則
釧路湿原自然保護官事務所 寺内 聡
- ・公益財団法人北海道環境財団 久保田 学、山本 泰志、安田 智子

事務局 第6回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ（以下WG）を開催する。

配布資料確認後、新たに参加することとなった長山委員より自己紹介。高橋座長の到着が遅れているため、到着まで事務局が進行する。

議事1 ワーキンググループの取組み報告

事務局 資料1について説明。質問、ご意見などがあれば発言をお願いしたい。

松本委員 釧路教育研究センターの教員研修講座として、毎年湿原を体験させてもらっている。

今年度は、午前フィールドワークとしてキラコタンで本来の湿原の姿を体験しながら湿原の持つ価値を考え、午後は温根内ビジターセンターで湿原に生じている課題について学び、湿原と人の共存の在り方を考えるといった大きな2本のテーマで研修を行った。参加者からは大変好評で、アンケートでは大変分かり易かったという回答が目立った。湿原を知る事、湿原の持つ課題から再生事業について知る事が出来た。この二つの視点が明確に午前と午後で分かれており、初めて湿原に触れた先生も、何度も本講座に参加している先生にも、共に得るものがあった。また湿原の持つ課題の新たな視点として、外来種について関心を示す先生が多くいた。釧路市内の学校では、多くの学校が湿原に行くことが難しいことから、教員が研修に参加して得た知見を子ども達に伝える事の必要性を改めて実感した。湿原へ出向く事が可能な学校の先生からは、今回、湧水量を簡易に計測したようなフィールドでの活動を多く知りたいとの要望もあった。

今後も環境教育と位置づけて釧路教育研究センターの講座として実施していきたいと考えている。湿原の歴史や成り立ち、生き物等、湿原を実感出来るようなフィールドワークを実施していければと考えており、湿原の良さと課題を実感し、湿原の持つ課題について共に考えていくといった流れを組んで研修を実施していきたい。3年間継続してきて、今回、特に分かり易かったという感想が多く、私たちにとっても大きなヒントとなり大変感謝している。

柴田委員 赤沼近くのフィールドで、「やちまなこ」にはまったり、スゲ原の上で地面を揺らしてみようといった体験を5,6年生12名と行った（添付資料「授業支援等の効果」参照）。日頃行けない所に行けて、湿原の大切さや素晴らしさが分かったという感想が多かった。安全面に配慮して子どもたちに道具などは持たせず調査等を行ったわけではなかったのも、子どもの体験としては素晴らしかったが、学びとの連携は出来なかったと感じており、体験を有効に働かせていく為にも、授業の組み立ての検討が必要との反省はある。

一方、鶴居と同じく「日本で最も美しい村連合」に加盟している長野の小学校から質問され、鶴居村の良さを子どもたちに書かせた時には、今回の体験や継続して学校として取り組んでいるタンチョウのえさづくりプロジェクトでの体験を踏まえて、子どもたちはスムーズに書くことができていた。調べてまとめるという部分では反省があったが、子どもたちの成長に関わる部分では、しっかり子どもたちの中に残っていると感じた。やり方を工夫しながら今後も体験学習に積極的に取り組んでいきたい。

長山委員 昨年度より5年生の総合的な学習の時間（以下、総合の時間）で「釧路湿原に関わる学習」について支援いただいている。

昨年度は、インターネットでの調べ学習を通して子どもたちが持った課題を追求していく際に声をかけていただいた。多くの専門家の方に来ていただき、子どもたちの学びに深まりを持たせるように進めることが出来たことは一つの成果と考えているが、インターネットから課題を見つけるというスタートだったため、課題と子どもたちの能力、理解度のつりあいがとれていない部分もあった。

今年度については、標茶高校の協力を得て、高校内にあるミニ湿原での体験や高校生の言

葉から子どもたちが課題を見つけ、それを深めていく段階で、湿原を案内いただいた。雄大な釧路湿原を目の前にし、課題がさらに深まった子がいた一方で、子どもたちの課題とフィールドワークの関連が薄かったことから、当初の課題に戻っていった子もいた。カリキュラムの組み方に工夫があればフィールドワークがより生きてくるといった課題もあるが、実際に湿原に行った事の感動は大きかった。自分たちの探求に結びつくかどうかに関わらず、釧路湿原から感じるものは一人一人の子どもにとって大きかったと感じている。

境委員 新学習指導要領の平成 32 年度の全面実施に向けて、総合の時間についても、これから作り上げていかななくてはならない。総合の時間の目標設定は各学校に委ねられており、内容についても学校が独自に取り組んで良い教科。ある課題に対して、こういった子どもに育てたい、そのために内容を作り上げていこうという形になっていけば、良い総合の時間になっていくだろう。各学年で行うことが決まっているというのは過去の総合の時間の形。これからの総合は、子どもたちが、自分たちが課題に思ったことに対して向き合い、新たな出会いがあった時に自分の考えを見つめ、最終的には社会に訴えていけるようになっていけば、良い総合の時間になっていく。これまでは内側に閉じていた総合の時間を、湿原を使うことによって、外にアウトリーチしていくことができる。自分たちも湿原の周囲に住んでいる一員であり、自分たちも何かをやらなければいけないと、子どもたちが変わっていったら、とても良い取り組みとなる。

長山委員から、子ども達のやり方でやっていたが、深まりはあったというお話があった。それがとても重要なことで、子どもたちがやろうとしたことを先生が支援して作り上げていければ良いと思う。今回は一つのきっかけとして、来年、再来年にはさらに深まっていくことを期待している。今の 5 年生が 6 年生になり川の学習を行う時に、湿原での学習がどのように生きていくのか、大変楽しみにしている。

安田委員 昨年、鶴居で行われた KODOMO ラムサールに参加した。子ども達が湿原や鶴居村そのものを自分のものにして自分なりの夢があり、今後どうしていきたいかをとてはっきりと発表していた。体感して自分のものにして行く事が非常に大切だと感じる。自然がなくなることが寂しいであったり、残していきたい、活用したいと思っていくということが非常に大切であり、自分で考える場が出来ていけば、また、そこに我々が少しでもお役に立てればと思っている。また、願わくは、こうした取り組みが、特別なものではなく、日常的に行われていくものになる事を期待している。

蠣崎委員 総合の時間を通して、どのような資質、能力を身に付けさせたいか、ねらいが明確にあり、そこに向かっていくためのひとつの題材として釧路湿原を扱っていくということであるが、子ども達自身がきちんと湿原に興味関心を持って学習を行っているのかが大切になってくる。総合の時間のねらいだけを考えれば、湿原に関心がなくとも、課題を追求するという経験値を身につけることができれば、違う題材に対して身に付けたスキルを活かしていくこともできるといった考え方もできる。一方で、ねらいプラスアルファの部分で、釧路湿原のどんなことに気がついてくれたのか、どのような思いを子どもたちが持ってくれたのかという部分も、授業のねらいの中に持っていかなければ、多種多様な方との関わりの中で釧路湿原を媒体にして学習している本当の意味合いが見えてこないのではと感じた。

教育委員会では何が出来るかは難しいが、例えば、学校と連携を取る中で釧路湿原を見てどう感じたのかといったことを、学校、WG に学習の足跡として残していく仕組みを作っていければと思う。今まで先輩達が気づいたことと、今の子どもたちが気づいたことを比較していく等、湿原の見方や感じ方を代々繰り返して伝えていくといった事も出来る。せっかくこの様なチームでやっているのだから、釧路湿原に直接興味関心を持てるような足跡を残せたら良いと感じた。

中川委員 6年生の総合の時間ではタンチョウをテーマに行っている。タンチョウについて、身近にいて知っている様で良く知らないという事を4月当初に子どもたちは気づき、鶴居に住んでいるものとして地域のことを発信していく使命を持っているといった話から、1年を通してタンチョウについて学習していこうという流れで現在の学習を進めている。学習を進める中で、子どもたちには様々な気づき生まれ、大人を含めた多くの人との関わりの中から様々なことを子どもたちは感じている。安田委員のお話にあった KODOMO ラムサールにも鶴居小学校から何人か参加させてもらっているが、そうした地域とのつながりを広げしっかりと深めていくことができれば、さらに学習が深まる。子どもたちに体験させる事はもちろん、人とのつながりを持たせていくことの大切さを、この1年強く感じている。

三光桜委員 教員対象のフィールドワークについては、理科教師が中心となって参加していたことから、積極的に参加していたと感じている。(添付資料「授業支援等の効果」参照) フィールドワークでは、この場所でどんな活動が出来るかといったことも紹介いただきながらの活動だったため、2時間が短く感じた。安全管理面での注意点なども良く分かったが、森林再生事業地での活動紹介では、どんな生き物が見られるかといったサンプルがあればより分かりやすかった。また、学校で実施する場合には、複数年継続して行うことで生徒が環境の変化や種子の豊凶も感じられて良いが、町のバスなどはないため、フィールドまでの移動が大きな課題である。

生徒向けのフィールドワークでは、生徒はとても生き生きと活動していた。事前学習で寺内保護官から具体的に目的等を解説してもらおう事が出来、虫嫌いの生徒にも配慮したカリキュラムを組んで頂けたのも良かった。アンケートでは、楽しかった、来年も機会があればやってみたいとの回答が多く、午前だけの活動では時間が物足りなかったとの意見もあった。当日の配布資料にも年による種子の豊凶のデータが掲載されていたが、年ごとの変化を実体験の中から感じられると良い活動になると感じた。

議事2 ウェブサイト、紙媒体による情報発信について

事務局 資料2-1、2-2、2-3について、プロジェクターによる映写を交えながら説明。5年を一区切りとして取組みを進めているが、今年度で3年目になる。次年度に4年目を迎えることとなり、授業支援の実績も蓄積されてきたことから、学校支援ワーキンググループ WEB サイトについては教員の関心を引くような情報の見せ方、整理の方法を考えていきたい。湿原データセンターについても教員の活用も想定して更新していく予定であり、お気づきの点があればご意見を頂きたい。

事務局 高橋座長が到着されたので、以降の進行を高橋座長にお願いする。

高橋座長 釧路湿原に関する様々な情報源の中で、授業での学習にどの程度役立ってきたか、改善点の希望などご意見を頂きたい。全てを一度に実現できるわけではないが、積極的に活用頂けるものにしたと考えている。

長山委員 教員が見識を深めるための活用と、子どもたちが学習の中で活用していくという2つの視点がある。調べ学習で子どもたちの関心が多様なテーマに広がっていった時に、対応する教員の数には限度があり、標茶小学校で言えば現在限界の人数。さらに少ない教員で対応していくとなれば、インターネット、書籍を活用していくこととなり、ゲストティーチャー、オブザーバーは大変助けになる。ゲストティーチャーに来ていただくことが難しい状況では、インターネットで調べる様に促すことになってしまうが、インターネットの中から答えを見つけて欲しくはない。そうした時に、本物を見てみたいという思いを高めるきっかけになればと考えている。インターネットに答えが書いてあり、それを児童が印刷して答えを

見つけたつもりになることは、残念と感じる。

高橋座長 前身のワーキンググループでも議論があったが、子どもたちを自然の中に連れ出してくれる先生、湿原の話を子どもたちにしてくれる先生が増えていけばという考えから、教員研修を行ったり、学習素材を作成してきた側面もある。

中川委員 6年生が見ても難しい内容だが、湿原データセンターにしか調べたい情報がないの
で見ると。教員の視点ではなく、子ども視点で作ってもらえればと思う。

柴田委員 子どもは体験だけだと情報収集が出来ず、情報だけだと体験がないため感動が生ま
れない。そこをつなぐのが教師の役目と考えている。フィールドでの体験の後、情報はどこ
から取れるかといえば、データセンターのサイトにしか解説は掲載されていないため、子ど
もたちはこのサイトを見る。しかし、データセンターに掲載されている内容は子どもには理
解できず、教員が何とか理解できるレベル。書籍やパンフレットなども含めて、子どもたち
が理解できる分かり易い情報はほとんどなく、WEB サイトではデータセンターしかない。子
ども達が調べ学習をする時は、何とかデータセンターのサイトを探し出したとしても、記載
内容がわからないので教員に質問に来るということになる。専門家に解説してもらえると良
いが毎回お願いする事は出来ない。また、まとめる段階で子どもたちの手元に資料がないと、
まとめていくことが難しい。このページは教員向けなので使いづらいというのが印象。

高橋座長 子ども向けではないと感じる具体的な理由は何であろうか。使用している漢字、文
字量、伝えようとしている内容の本質的な部分が子どもに理解できるものではない等、いく
つか考えられるが、それは何であろうか。

柴田委員 学習資料や授業モデル等が入っているので、子どもたちはこれらの情報は先生用だ
と感じる。

高橋座長 中学校でも同じだろうか？

三光桜委員 学校支援の WEB サイトは見た事があったが、データセンターはこれまで見た事
がなかった。教科書に湿原は出てこないで中学校の教員にはなかなか必要性を感じられな
い。教科書に関連するものとしては、1年生で学習する流水の働きと地層の出来方の単元で
の活用が考えられる、また、3年生の終わりに環境の保全を学習するが、学習時期のことも
あり掘り下げて行うということは、なかなか出来ていないのが現状。上手く活用すれば使っ
ていけると感じる。また、湿原を再生する必要性を教員も生徒も理解出来ていない。その基
盤があれば、3年生の理科の学習の中で、地域の環境を大切にしていくという意識が生まれ
るのではないかと感じた。データセンターは、配布資料の項目を見ただけだが、見えそうな
データが多く掲載されているように感じるが、文字が多いので生徒には使いにくいかもしれ
ない。例えば、カテゴリ分けをして各項目をクリックすることで詳細情報に導くなどすると
見やすくなる。

高橋座長 人に何かを伝える時の伝え方として、自分の言葉使いや発想を押し付けても伝わら
ない。釧路湿原のことや自然再生の必要性などを説明する際に、私たちはこのことを忘れが
ちになっている。

境委員 小学生が検索する時に自分の身の丈以上の事を調べさせてはいけない。自分たちで考
えられるような内容でなければいけない。そこは先生が助言していく必要がある。例えば、
3・4年生が湿原の出来かたを調べたいと思った際、実際に湿原に行ってわかった事をまとめ
ていけば良い。それ以上の事を調べさせようとするからこそ、子どもたちは様々な検索をし
てしまう。先生が何を学ばせたいのかが重要で、目指す子ども像や学年の目標に向かってい
くように調べ学習をさせていく。子どもたちが使う媒体としてインターネットはどうなのか
という議論であるが、少なくとも、データセンターの内容は、大人、つまり一般の方々が読
んで理解できる記載にしてもらえたらと思う。内容に対して気になることは無いが、掲載さ

れているものは最新の情報である必要がある。子どもたちに調べさせるために、先生がどのように教えていくのが重要で、身の丈にあってないものを、どんなに平易な表記にしたとしても子どもたちに理解できるものにはならない。

事務局 来年度から学校支援の WEB サイトの更新を具体的に検討していく予定。これまでの先生方の意見を踏まえると、現在の WEB サイトは、欲しい情報にたどりつきづらいものになっていると感じている。なお、WEB サイトの改善は再来年度を予定しており、この場で頂いた意見をたたき台にして、次回 WG 以降に深い議論をしていきたいと考えている。本日は、現在のサイトの改善という視点だけでなく、現在掲載していない内容も含めて自由な意見をいただけたらと考えている。

高橋座長 学校支援の WEB サイト、チラシ、データセンターに対しての意見は合わせていただいて構わないか。

事務局 チラシは来年度の早い時期での作成を考えているため、先にこちらの意見を頂きたい。現在のチラシは、学習を支援するので問い合わせくださいというコンセプトで作成している。例えば、教員に呼びかけるキャッチとして、どのような切り口が関心を引くであろうか。

高橋座長 多くの情報を掲載することで、わかりづらくなるという側面もある。そういったことも考えなければならない。

中川委員 現在のチラシの項目立てについては、自分は良いと感じるし、学校で回覧された際に私は関心が引かれるが、関心がない先生の目には留まらないだろう。授業で湿原が使えるということがチラシから分かると、そうした先生の目にも留まるかもしれない。

長山委員 今でも十分魅力的だと思う。関心のある先生は機会があれば飛びつくだろう。釧路湿原に疎遠であった先生を引き込むためのチラシであるならば、発信の方法が重要であろう。例えば、教育委員会から推奨してもらい学校に配布するなどが出来れば先生達がチラシを見る目も変わってくるかもしれない。

松本委員 このチラシを含めて事務局からこれまで頂いたものについては各学校に配布している。事務局から配信されるワンダグリンダメールニュースも各学校に配信しており、気づく機会をたくさん作るようにしている。

高橋座長 教育委員会には膨大な情報が届くため、難しい面もあるかと思うが、デザインの問題だけではないというご指摘であった。

事務局 10年間様々な学校を訪問してきて、関心を寄せていただける先生もいる一方で、多くの先生からは湿原は関係ないと言われる。例えば、新しい学習指導要領で問われている事が湿原を使ってできるという事を切り口にして先生方の目に留まるようにした方が良いのか、または、釧路湿原に関心を持って下さる方を対象としていくのかで、チラシの構成が変わってくる部分もあるものと考えている。

高橋座長 非常に難しい課題であり、もう少し時間をかけて検討していく必要がある。

事務局 改めて、委員の方を訪問し意見をお伺いしたい。

松本委員 A4 サイズの両面印刷とし全ての学校に配布することを考えているのか。より情報を掲載したパンフレットの的なものを作ることは難しいだろうか。例えば、釧路市で言えば、湿原を活用した学習を行っている学校をピックアップする事が出来るので、そうした学校を対象として、学習プログラムなども掲載したパンフレットを配布するという考えもある。

事務局 予算的な制約からチラシの作成を考えているが、実践校を対象としたリーフレットの的なものを自前で作成、印刷し配布するということも検討していきたい。

蠣崎委員 釧路湿原に特化して総合の時間で学習を行っている学校は、標茶町内では標茶小学校の他にはない。標茶高校がミニ湿原を活用した取組みを行っているので、標茶高校と関わりのある学校は、水生昆虫や湿原に生息する植物といった切り口で学習を行う学校もいるが、

釧路湿原といった大きなテーマが来たときに、既に取り組んでいることがあり、新たに総合の時間に組み込んでいくのは難しいと考える学校がほとんどであろう。このWGの取り組み内容は評価できることなので、中身をクローズアップ出来たら良いと思う。紙媒体も良いが今の時代はウェブサイトを利用する先生も多い。ウェブサイトの向こうに誰を想定して作っているのかを想定する必要があり、このチラシについても同様で、学校の先生を想定するのであれば、「学習を支援します」というキャッチはわかりやすくて良い。どんな支援メニューがあるか、研修も行っているといったことがチラシを見ればわかり、さらに詳しいことを知りたいと思えばWEBサイトを閲覧するだろう。WEBサイトメニューバーの「釧路湿原を題材とした学習資料」については、子どもたちでも見ることができる内容で考え、それ以外のコンテンツについては教員を対象にしたものにする。今の小学生、中学生の興味を引くにはバーチャルリアリティの技術を活用すると関心を引く。文字による解説を行うのではなく、写真を中心として映像があれば興味関心を引く。音声はなくても構わない。様々なフィールドを歩いた様子、動植物の動画などで良い。これはどこに行ったら見ることが出来るのかと関心を持ちフィールドでの体験につないでいく。子どもたちの関心を高めることにねらいを絞っていけば、中身が変わっていくであろうし、チラシにも「ウェブサイトではバーチャルな体験が出来ます」といった案内をすることも出来、それが宣伝の一つにもつながってくる。

「詳しくは実際に現地へ行って体験学習しませんか?」「私たちがお手伝いします」といったように、チラシだけではなく、WEBサイトと関連させていくと発想が広がっていく。

高橋座長 有意義な多くの意見に感謝したい。いただいた意見を踏まえ、今後、検討していきたい。

議事3 これからの取り組み予定

事務局 資料3について説明

高橋座長 教育研究センターの実施講座としてどの様な内容が求められているとお考えか?

松本委員 環境教育の分野として、貴重な講座と我々も捉えている。次年度についても、環境教育の一環として研修講座を企画していくことで先生方に関心を持ってもらいたいと基本的には考えている。先生方が体験した事を子ども達に伝えられる事を大事な視点として研修講座の内容を検討していきたい。

高橋座長 中学校で湿原を題材としたフィールド学習を行っていく上での課題や可能性について、ご意見をいただきたい。

三光桜委員 昆布森中学校としては、外部講師の受け入れは積極的に行いたいと考えており、前向きに検討していきたい。

高橋座長 発表の場づくりについて境委員、長山委員からご意見を頂きたい。

境委員 1月24日に標茶小学校での総合の時間の発表があるので、可能であれば皆さんも見に行ってもらえたらと思う。それをきっかけとして、そうした発表が出来るということを広めていけたらと考えている。学校の中で閉じるのではなく、次の段階として、湿原周辺の学校が集まって湿原に関する学習の研究発表の場を作るという形につなげていければと思う。そうした場で、環境省の方や様々な方が子どもたちに示唆を与え、子どもたちからも示唆を受けるような場が展開されていけば、総合の時間のこれからのスタイルを釧路から発信しているのではないだろうか。発表ボードを今回持参したが、王子マテリアルに作成いただいた。標茶小学校では、同様のものを研究発表で使っていただく予定であるが、壁面がない場合でも机に自立させ、ボードの間に資料などを置くこともできる。探求の過程を一枚の紙にまと

めていくことを意識させて学習を進め、何度も繰り返していくことで、自分で課題を見つけ、考察して、結論を出せるような子どもたちが育っていくのではないかと考えている。今年度は最初の取組みであるが、良いものであるということになれば、今後、広げていければと考えており、多く使われることで、発表ボードの単価も下がっていくだろう。

長山委員 1月に入ってからになるが、子どもたちは、動機、調べていく手順、わかったことなど、構成も意識しながらとりまとめを進める事が出来ている。完璧なものとは言えないが、子どもたちも、まとめやすかったと言っており、大変有効だと感じている。今回、一学年の児童全員分の発表ボードをいただいており、一人ずつ発表を行う。体育館を使って、グループ毎に時間を区切って屋台方式で発表を行う形で子どもたちも互いに交流し合う。他学年の保護者も含め、地域の様々な方に来ていただくコンセプトを持った発表会であり、標茶高校の学生や先生にも来てもらえたらと考えている。この形をこれからも続けていきたい。

高橋座長 境委員の発言をお聞きし、学校は保護された空間でなければならないと同時に、外部と多くのつながりを持った場所でもあるべきで、それをどのように実現していくかが今後の課題であることを感じた。時間となったので事務局へお戻りする。

事務局 今後の予定について説明させていただく。WGの委員は年度毎にお願いしており、先生方については、次年度に改めて委員参加のお願いをさせていただく。教育委員会の方については、充て職で参加をお願いしており、引き続き参加をお願いすると共に、異動があった場合には、後任の方に引き継ぎをお願いしたい。専門家の方についても、引き続き参加をお願いしたい。次回のWGは夏休み期間中に実施を予定している。

これで、第6回学校支援WGの会合を終了する。